

金蛇水神社アートプロジェクト 二〇二三



金蛇水神社アートプロジェクト 蛇道 2023

春の展覧会

日時：令和5年5月9日（火）～5月25日（木）

参加アーティスト：中里広太、高橋健太郎、チカコ・ヤマシタ・ストロバイ

展示場所：神楽舞台、Sando Terrace IKoMiKi Garelly、境内内授与所、第2駐車場内待機所

イベント：「How Plants Think ドローイング」

令和5年5月10日（水）、11日（木）、16日（火）、17日（水）、22日（月）、23日（火）

いずれの日も午後1時～午後4時

コーディネーター：細萱航平

秋の展覧会

日時：令和5年9月26日（火）～10月18日（水）

参加アーティスト：オカベサトシ、中里広太、高橋健太郎、チカコ・ヤマシタ・ストロバイ、細萱航平

展示場所：Sando Terrace IKoMiKi Garelly、Sando Terrace 壁面、境内内授与所

インストーラー：細萱航平

春の展覧会

春の展示は、令和5年5月9日（火）から25日（木）の17日間で開催された。展示はギャラリーの他、神楽舞台や境内の授与所、第2駐車場の待機所まで及び、アーティストたちは金蛇水神社に点在するユニークな空間に合わせて独自の作品を展開した。また会期中には、出展作家であるチカコ・ヤマシタ・ストロバイによる参加型アートのイベントが催され、神社を訪れた人々を楽しませた。地域芸術祭という取り組みが各地で行われているが、この春の展覧会もまた、金蛇水神社の特殊な空間全体を展覧会の空間に変えようと取り組んだものであった。

内在する意思

2023

高橋健太郎

Växjö 01-09

2018

チカコ・ヤマシタ・ストロバイ

風が水をはこぶ

2023

高橋健太郎

How Plants Think ドローイング

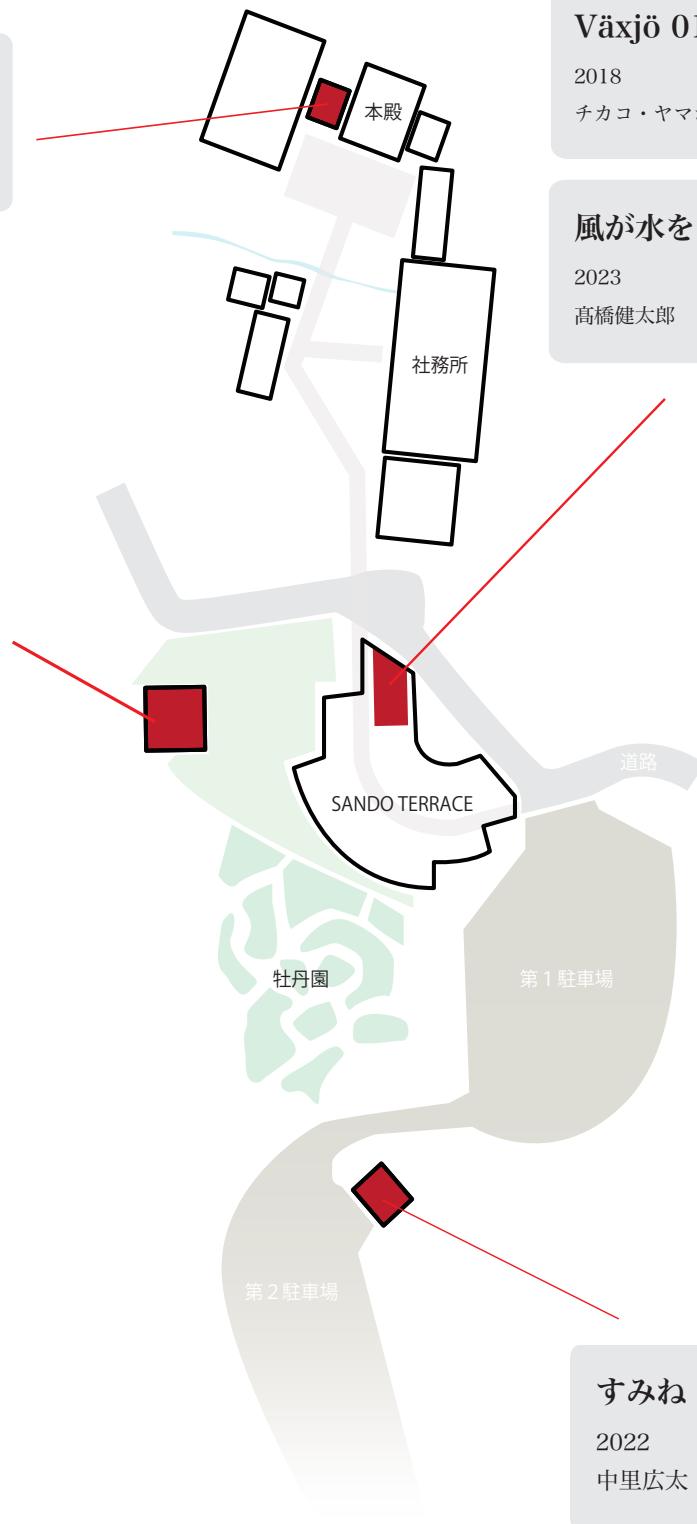
アーティストのチカコ・ヤマシタ・ストロバイによる参加型のイベントを行います。壁に投影された植物の姿をなぞりながら、みんなで大きな絵をつくります。時間中、いつでも体験いただけます。

開催日

10日(水)、11日(木)、

16日(火)、17日(水)、

22日(月)、23日(火) 各日午後1時～午後4時



すみね

2022

中里広太

高橋健太郎



上 《風が水をはこぶ》2023

下 《内在する意思》2023

彫刻家である高橋健太郎は、木や鉄、石といった、彫刻ではオーソドックスな素材を用いて作品を制作することが多い。しかし、実際にその作品を見ると、一般的にイメージする彫刻とはやや異なる印象を受けるかもしれない。そこでは空間全体に素材が配されており、インスタレーションと呼ばれる形式で作品が展開している。

《風が水を運ぶ》は、沈んだ色に錆びた鉄板が器のように曲げられたものが床に複数枚展開されるとともに、その先には5本の細い丸太を組んだ支えに、半分に割られてくり抜かれた丸太が下げられたブランコのような構造体が配置されている作品である。

鉄の器はよく見るとその縁がビーズのような形状になっているが、これは鉄板がガス溶接機等によって溶断されたときにできる跡であり、また器には細かい凹みが無数についているが、これは鉄板を槌で叩くことによって曲げたときの跡である。つまりこの花卉のようにも見える器は、八角形に切り抜いた鉄板を叩いて曲げるだけ、という非常に素朴な操作によって成型されたものである。一方の丸太によるブランコ状の構造体についても、丸太を組んだりくり抜いたりしてつくられているだけであり、こちらも木に施された操作が想像しやすい。言い方を変えれば、高橋は最低限の操作を素材に加えることで、素材そのものを提示しようとしているように思われる。

同様のことは、《内在する意思》についても言える。本殿の隣に位置する授与所に設営された本作では、コンクリートを流し込むための型枠が正四角柱のかたちに組まれ、その型の中には丸太を円盤状に切り取ったものが多数、およそ型枠の口と同じくらいの高さに浮いている。授与所という性質上、鑑賞者はカウンターの向こうにある作品を覗き込むように見ることになる。その上には電球が設置され、円盤状の丸太とその下に広がる暗い空間を照らしている。本作においてもまた、高橋が行っている操作はシンプルであり、型枠を組み、その底面に用意した木材に立てた鉄棒に円盤状に加工した丸太を差しているのみである。

このプロセスを通じて高橋が見ようとしているものは何なのかといえば、その一つは素材に宿るもの、あるいはその素材の内側外側という観点であろう。2016年に宮城県美術館で行った公開制作「材を開くー内在する意思ー」では、高橋は大きな角柱状の木材の2面をチェンソーでくり抜き、それらを4本、くりぬいた部分を内側にして組み合わせることで、ひとつの大きな木の箱をつくりあげた。その内側は照明の加減で中が光っているようにも見え、大きな直方体となる外見と、その内側の空間が対比されるものとなっていた。

素材に内在するものを見ようとするとき、手の込んだ操作は逆にそれを隠してしまい、妨げとなる。そのときに行われる最低限の操作が、素材をくり抜き、内側をつくる、ということなのだ。内側をくり抜かれた素材は、器や舟、箱を代表されるように、何かを内包する、納める、運ぶかたちとなる。つまりは内側の空間が生まれることで、その素材はある意味で道具（＝目的をもって設えられたもの）になり、機能を持ち始める。内側の空間をつくるだけで、そこに目的意識に基づくあらゆる行為を受け止める余白が生まれるのである。ここに、高橋の見ようとする「意思」が存在しえるのではないか。

そして、この内側の空間を設えるという行為は、その素材の内側の空間と外側の空間という分別を生むことでもある。だが詰まるところ、それは人間による便宜上の分別でもあって、実際にはその内側と外側は繋がっている。高橋が内側の空間を設えることで生み出した余白は、同時にその外側にも別の意味を生じさせるのである。

私たちは、鉄の器や円盤状の丸太に睡蓮の姿を重ね、それらが配置された空間に水面を幻視しても良いし、あるいはギャラリーの中に舟を運ぶ風を、授与所の空間に宇宙を見ても良い。高橋が設える内側の（あるいは外側の）空間には、私たちの能動的なイメージを受け止めるだけの余白が広がっている。

チカコ・ヤマシタ・ストロバイ



上 《Växjö 01-09》2018

下 《How Plants Think ドローイング》2023

チカコ・ヤマシタ・ストロバイは、アーティストおよびサステナブルデザイナーとして活動を続けており、主に植物をテーマとした参加型アートを手がけている。本展においても、金蛇水神社の牡丹園から得た植物のイメージを壁に投影し、それを参加者になぞってもらうという参加型アートと、同じ活動を2018年にスウェーデンで行った際に参加者が描いたドローイングのイメージを転写した作品群《Växjö 01-09》を展示した。

ヤマシタが用意するのは、主にその土地の植物の写真を透明フィルムに転写したものの複数枚、それを映すためのオーバーヘッドプロジェクター（OHP）、そしてそれを投影する大判の紙、ということになる。参加者は好きな植物の透明フィルムを選び、それをOHPの台座に乗せ、壁に貼られた紙に投影する。すると植物のイメージが紙の上に現れるので、それをなぞっていく。これが何人もの参加者によって同じ紙の上に行われていくので、やがて紙の上には様々な植物の輪郭が重なっていく。こうして、植物と人間の関わりについて考え、その持続性などについて議論する機会を提供したいというのが、ヤマシタがまず考えていることだ。

様々な参加者が線で植物の輪郭をなぞるため、その参加者の属性に応じて線にも特徴が現れる。太く濃い線で描かれたものもあれば、細く薄い線で描かれたものもある。迷いのないスピード感のある筆跡もあれば、丁寧に描かれたゆっくりとした筆跡もある。申し訳なさにプツプツと切れる線もあれば、ダメ押しとばかりに二重になぞられた線もある。故に、行われていることは単純であるが、現れてくる線は手前に奥にリズムカルに鑑賞者の視線を揺さぶり、紙上の空間に奥行きを与えている。更に言えば、不思議とその線を描いた人物がどのような人物であったかが想像され、そのような意味では紙面以上の空間の広がりを感じさせる。

ただ、ひとつ特徴的に感じるのは、ヤマシタがこれを様々な媒体で複製することを厭わないという点である。《Växjö 01-09》は、参加者が描いたドローイングをシルクスクリーンで転写しているものを含んでいる。また今回金蛇水神社で参加者に描いてもらったドローイングについても、イメージをスキャンし、彩色に置き換えたものをプリントアウトして秋に展示する予定とのことだ（これはヤマシタが秋に海外に滞在する予定であったことも関係しているが）。シルクスクリーンにしてもプリントアウトにしても、その線が現れる過程は鉛筆で描くこととは異なるため、置き換えた時点で線が有している微妙な濃淡の違いやストロークの差などは情報として失われる。ただしその代わり、インクによる異なる物質性や色などの情報が加味されることになる。この操作は基本的にヤマシタによって行われるのであるから、ヤマシタの見ている世界がより反映されたものとなる。そのような意味では、ヤマシタが重視しているのはその場で生まれるドローイングの一回性ではなく、それができるだけ多くの人々に共有されることで生まれる共有知やコミュニケーションの方なのだろうと思われる。

出来上がるイメージに目が向きがちであるが、むしろそのイメージを得る過程を介して生まれる人々の交流がヤマシタの作品には前提とされているのであり、つまりはコミュニケーションの場の創出（デザイン）自体がヤマシタの作品である。実際にドローイングのイベントを行うときには、極力ヤマシタ自身がその場に滞在し、自ら参加者と会話をしながらドローイングを描いてもらっており、その姿勢がこのことを裏付けている。

そもそもなぜアートと呼ばれるものが私たちに求められるのかといえば、それが私たちの心を動かすからだ。鑑賞者の心が動かないのであれば、どのような作品であってもただの絵具や素材の塊に過ぎない。その点に着目するのであれば、必ずしも絵画や彫刻のようなかたちのあるものでなくても、コミュニケーションを通じてアートは成立しうる。ヤマシタの作品の核心は、そのようなかたちのないところに存在しているのだろう。

中里広太



本殿から少し離れた第2駐車場に、かつての待機所が移設されている。サウンドデザイナーの中里広太は、この場所を展示会場に選んだ。小さな部屋の壁際には、もともこの場所に置かれていたプラスチック製のベンチが二つ置かれ、鑑賞者はこのベンチに座ってスピーカーから流れる音に浸り、プロジェクターによって部屋の角に投影される映像を眺めることができる。カーテンは閉められ、部屋の中は程よく暗い。

中里の作品は音と映像によって構成されているが、まず端的に言って積極的に映像を見せようとするものではないだろう。様々な風景の白黒写真が緩やかに切り替わっていく映像であるが、画像は少しずつ透明度が変わる処理によってフェードイン、フェードアウトし、前後の画像は少しずつ重なっていく。しかしこの映像は、正方形に近い部屋の隅から対角の隅に投射されており、部屋の角で直角に折り曲げられたように映されるだけでなく、背景となる壁の木目の影響を多分に受ける。このようなことから、中里が映像そのものを作品として見せようとするものではなく、映像を空間に投影することでインスタレーションとして扱っていることがわかる。

音もまた映像と同じく、音自体を積極的に聞かせようというよりは、それが空間を満たすことに意味を持たせているように思われる。低音が基調のように鳴る中で、環境音や電子音、ノイズのような音が、遠くからやってくる波のように交代交代に静かに流れてはいつのまにか消え、次の音に移り変わっていく。それが映像と同じようにフェードイン、フェードアウトし、複数の音が重なって聞こえてくるようになっていく。しかし映像と同期しているわけでは無いようで、ずっと眺めていると映像の終わりと音の終わりが合っていないことに気づく。明らかな盛り上がりなどは無く、ただゆっくりと移り変わっていく音や映像は瞑想的で、カーテンの閉められた仄暗い部屋にいても手伝って、つい放心したように空間に身を委ねてしまう。

やがて耳や目が慣れてきた頃、ふと聞こえてきた鶯の鳴き声が、これは果たしてスピーカーから流れたものだったのだろうか疑問を抱かせる。もしかしたら、この待機所の外にいる本物の鶯の声ではなかったか。あるいは、遠くから聞こえてくる（聞こえたような気がする）飛行機の音も、果たしてスピーカーから流れる音なのか、外から聞こえる音なのか。カーテンの隙間から漏れる光が壁や床に淡く射し込み、それが白黒の映像と同じ色のようにも見え、外の光とプロジェクターの光の区別が曖昧になっていく。映像は光であったことに気づかされ、それが空間に溶け込んでいるように感じられる。こうして、いつのまにか小さな室内にいたはずの自分が感じる対象の範囲は室外まで拡張され、中里の作品を鑑賞していたはずがその周囲の環境まで感知するようになってしまう。

室内と室外が感覚の上で半分ずつ重なったような状態に置かれ、私たちは日常と地続きでありながら、そこからわずかにズレてしまった異世界にいるような気持ちになるかもしれない。私たちがいる空間と中里が見せる世界は緩やかに溶け合い、重なり合い、なんの変哲もない風景を見ているはずなのに、どこか違和感が拭えない。中里が本作品を語る時に使った「新しい風景」という言葉はそのような意味ではなかったか。まるで、胎内にいてまだ見ぬ母親の心臓の鼓動を聞きながら、同時に胎外から響く世界の音をも聞くかのように、小さくて仄暗い室内の中で感得されるのは、重なりによる複層性とその違和感をそのままに、感覚の上でひとつに混ぜ合わされる風景である。

秋の展覧会

秋の展示は令和5年9月26日（火）から10月18日（水）にかけて開催した。当初は、春の展示の成果を踏まえ、アーティストと様々な事業所のコラボレーションによる成果展示を想定していたが、実質1年目となるこの試みは期待通りにはいかなかった。このような現状から秋の展示は、来年度の出方を占う意味も込め、出品作家を2名増やした上で、春の展示と同様にアーティストの作品展示を行った。ギャラリーの他、参道途中の壁と、境内の授与所の三箇所で開催を行い、春よりは作品展示という様相を強めた。可能な作家には、春の展示を踏まえて本展のために新作の制作を依頼した。

住人と色

中里広太

入口あるいは出口 / 出口あるいは入口

高橋健太郎

点・線・面

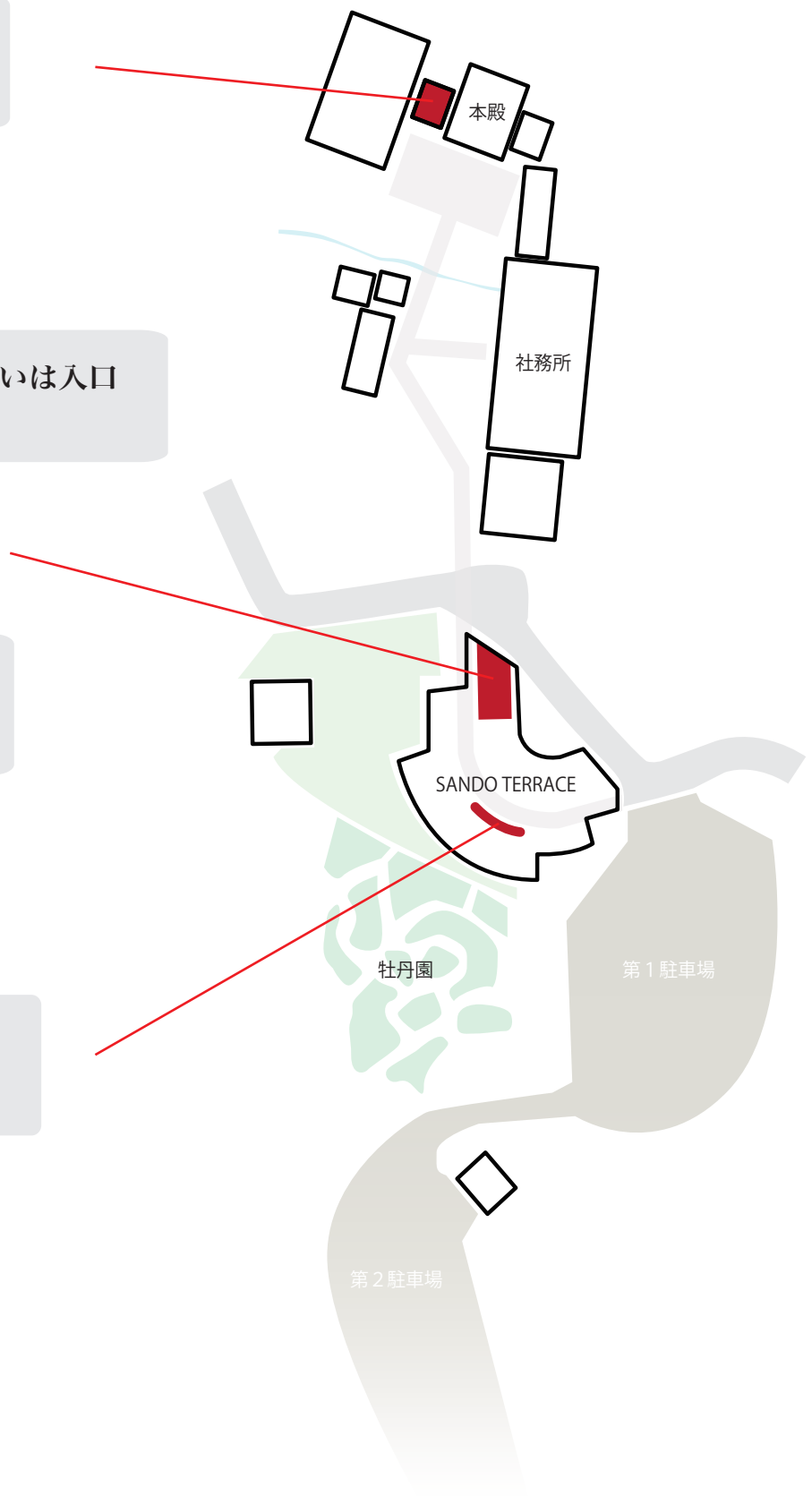
オカベサトシ

HPT13 金蛇水神社 5-11

チカコ・ヤマシタ・ストロバイ

peel off

細萱航平



中里広太



《住人と色》

中里広太はサウンドデザイナーとして活動しながら、映像を交えたインスタレーション作品も手がけており、春に続いて秋でもサウンドと映像を用いた作品を展開した。授与所に設置された3つの液晶モニターからは、中里によってマスタリングされた環境音を伴う3つの映像が映された。岩沼周辺から集めたという風景画像がゆっくりと切り替わっていく映像群は互いに異なるものだが、ある一点はもう一点の映像を白黒に変えたものであるなど、関係性を意識して作られている。奥行きをもって、しかしどこか雑然と配置された液晶モニターのモノとしての存在感もあいまって、まるで現実空間の真似をした別空間を見ているような、違和感のある空間を授与所につくりあげた。

高橋健太郎



《入口あるいは出口／出口あるいは入口》

高橋健太郎は、春から引き続き展示に参加する美術家で、秋の展覧会では秋保石を用いた2点の小品《入口あるいは出口／出口あるいは入口》を展示した。1点は立てた石の直方体に扉のようなかたちをした空洞が彫られ、もう1点では寝かした石の直方体の内側をくり抜き、階段につながる入口のある小さな部屋のように仕立てている。春の展示と同様、素材とそれが持つ内側／外側への関心が伺える作品であり、素材そのものが内側に空間を孕むことで生まれる意味についての言及のように思われる。タイトルが示すように、まるで石窟のようにも見える本作では、くり抜かれた空間は内側と外側を繋ぐ道として意味合いが持たされ、鑑賞者を空間的な夢に誘うようにも見える。

オカベサトシ



《点・線・面》

オカベサトシは、秋から展示に参加したイラスト・クラフト作家で、本展では墨を用いたイラスト9点《点・線・面》を出品した。オカベのイラストは墨で描いた際に現れる形象に、笠を被った丸くて愛らしいキャラクターを描き込むことで制作される。筆墨硯紙で描かれた幾何学模様や勢いのある筆跡は、墨に特有のにじみ等もあいまって、いわゆる墨象的であるが、しかしそこにキャラクターが描かれることで画面空間のスケールが決定され、墨の形象を岩峰のようにも大樹のようにも、あるいはゲーム世界に現れるような浮遊する地面のようにも見せている。このような操作により、墨の形象に風景としての意味合いが与えられている。

チカコ・ヤマシタ・ストロバイ



《HPT13 金蛇水神社 5-11》

チカコ・ヤマシタ・ストロバイは、春の展示で参加型アートイベント「How Plants Think」を行った。このプロジェクトでは、参加者は植物の画像が印刷された OHP フィルムを選び、壁に投影されたそのイメージをそれぞれがなぞることでドローイングを行う。春には金蛇水神社で集められた植物の画像でこのプロジェクトを行い、秋にはそのドローイングを画像処理した上でプリントアウトした 10 点の平面イメージ《HPT13 金蛇水神社 5-11》を出品した。線とその周りの空間を鮮やかな 2～3 色の平面構成に落とし込んだそのイメージは、植物をなぞるという質朴な行為によるもののためか、どこか無邪気な喜びと畏れのような少しの怖さが交差して、見るものに話しかけてくるようにも感じられる。

細萱航平



《peel off》

細萱航平は春にはコーディネーターとして展覧会に参加していたが、秋には彫刻家として小品2点を展示した。《peel off》は、細萱が金蛇水神社の裏山を散策した際に見つけた地層を剥ぎ取り、それを動物の革と縫い合わせることで制作されている。蛇の脱皮に着想を得たという言葉通り、両素材はそれぞれの表皮（表層）を剥ぎ取ることで得られる。表皮は自己と外部を隔てる境界であり、時にはそれを脱ぎ去ることが成長を意味する。そのような表皮を異なるものから採取し、縫い合わせて接合する細萱の作品は、コラージュであるとともにキメラでもあり、異質なものの同士の共存についての言及を含んでいる。

作家プロフィール

オカベサトシ イラスト・クラフト作家

1984 年山形県鶴岡市生まれ。宮城県仙台市在住。2011 年より「岡部工房」の屋号でイラスト、広告、クラフト作品などを制作。現在は筆墨硯紙を使用した「墨画」を実験を重ねながら制作している。

website : <https://okabekobo.me>

チカコ・ヤマシタ・ストロバイ アーティスト・サステナブルデザイナー

宮城県仙台市出身。リンネ大学芸術人文学部サステナブルデザイン科卒業（スウェーデン）。現在スウェーデン・ベクショー市在住。2011 年より同市にて地方公共団体と共に自然環境・地域文化等の社会課題を考えるデザインプロジェクトに参加。スウェーデン、宮城県を中心に自然環境・地域文化を一緒に考えるアート展・ワークショップを開催している。近年の主な展覧会に、2016 年「テリーポスターのための 100 のポスター展」(Cinema Svetozo, チェコ共和国)、2018 年「Collective Design Exhibition Change」(Växjö Art Hall, スウェーデン)、2022 年来場者参加型アート個展「How Plants Think」(宮城県美術館県民ギャラリー) など。

website : <https://chikako-stroberg.myportfolio.com>

高橋健太郎 美術家

1978 年宮城県石巻市生まれ。2001 年東北生活文化大学生活美術学科卒業。現在仙台市在住。木、鉄、石、コンクリートなどを素材とし、自然やその原理などを主なテーマとした彫刻、インスタレーション作品を制作。東北、宮城を中心に発表。近年の主な展示等に、2022 年の個展「一呼吸する庭」(仙台アーティストランスペース)、2016 年の公開制作「材を開くー内在する意志ー」(宮城県美術館) などがある。

website : <http://cdlab.holy.jp/takahashi-kentaro>

中里広太 サウンドデザイナー

1983 年宮城県仙台市生まれ。2008 年より音の即興アーティストとして活動をスタートさせる。年一回の個展ではサウンドインスタレーションの発表と、毎回多彩なゲストを招いて即興パフォーマンスを行う。2016 年 9 月から続けている「月刊コアプロジェクト」では、毎月 CD を作成し限定枚数無料で配布している。2019 年、2 枚目の CD アルバム『Foot Scape』をリリース。

X (旧 twitter) : @KORTER20

instagram : dj.korter

細萱航平 彫刻家

1992 年長野県生まれ。2020 年広島市立大学大学院博士後期課程総合造形芸術専攻修了。現在は仙台市在住。深い時空間をテーマに制作する。近年の主な展覧会に、2023 年「トライアル・ギャラリー 2023」(伊那文化会館) など。

website : <https://koheihosogaya.com>

金蛇水神社アートプロジェクト 蛇道 2023 展覧会報告冊子

編集：細萱航平

表紙題字：亀井勤

文章：細萱航平

写真：細萱航平（ただし 7p 下の写真のみ高橋健太郎）

印刷：株式会社プリントパック

発行日：2023 年 11 月 28 日